

わたしの京都

河野裕子

家はわたしだった―岩倉上蔵町

ひっこしばかりして来た人生で、二十回は

越えると思う。結婚後も各地を転々とし、十数回のひっこしをした。アメリカの首都ワシントンDCの郊外に二年暮らしたが、ここでもやはりひっこしをした。結婚後いちばん長く暮らした所は、京都市左京区岩倉上蔵町である。上蔵町は、「あぐらちよう」と読む。ここには八年間暮らした。

二人の子供たちの十代のおおかたは、上蔵町の家ですぎていった。そのことを思うと、いささか感傷的になるが、この家はちよつと風変りな家だった。家の裏を岩倉川が流れていて、六段か七段の堰がある。この堰を落ちる水音が仲々のもので、暮らし始めた頃は、毎日大雨のようだと思った。しばらく暮らしているうちに、これは大雨というより、滝の中の家というのがびつたりの実感になってき

た。

水音に負けるまいとテレビの音量をあげるごとと、電話で話しくいことを除けば、この家の住みごころはよかった。水の傍で暮らしと人間のこころは安らかになるのだ。二十代の半ばまで暮らしていた滋賀県が琵琶湖を抱えた風土ゆえの落ちつきと奥ゆきを持っていたことを改めて思い出した。この家は川の脇に建っているのに、二階の部屋にすわつてみると、野原のまん中にスカートの裾を広げてすわっているような広々とした気分になるのであった。

ひっこしばかりの人生の中で、岩倉はいちばん長く暮らした土地であり、またいちばん古い歴史を持った土地だった。歴史以前の古さといっぺいかもしれない。その古さは、歴史の本に書かれている事件や事柄を越えて、

山や木や石に直につながってゆく。岩倉(磐座)が、神の依り代であることが、ここに住んでいると何となく体感できるのだ。

こういう土地に、子供たちの十代と、私の四十代が過ぎていった。過ぎてゆくあわただしい日常の時間の中では多分あまり意識していなかっただろうが、私はやはり、中年を過ぎつつある自分の心身を歌にしないではいられなかった。そして、青春期にさしかかろうとしている子供たちの上を過ぎゆく時間との往還を、わたしはそれなりに味わい楽しんでいたことに気づく。

過ぎてしまった青春を子供たちと一緒に、もう一度生き直しているようなときめきと不安。すぐそこに来ている筈の老いというものへの訳のわからなさ。それらが同時進行している不思議な四十代。

けれど子供たちとの時間は、ほんとうはもう終わっていることに気がつかない訳にはいかなかった。滝の中の家に暮らしているような水音を聞きながら、いつも私は家にひとり居たような気がする。一日中陽のあたる南向きの二階建ちの家。そのうえこの家には、びつくりするほど広い半地下室があり、その半地下室の部屋にも明るく陽がさしていた。

八年しか住まなかったけれど、わたしのおばあさんの代から住んでいたような住みついた気持ちでわたしは、春ごとにコスモスの種をまき、庭じゅうをコスモスだらけにしていた。半地下においてゆくと、部屋の前にある庭には白いコスモスが逆光の中に花びらを重ねていた。毎年、同じ場所に白いコスモスが咲き、八年間わたしはそれを一人で愛し見詰め続けていた。

コスモスの花が明るく咲きめぐり私が居らねば誰も居ぬ家

「家」

家族は四人しかいなくて、わたし以外の三人は、しょっちゅう家をあけていて、その出入りは、すうすうという形容がびつたり、軽やかな空気がみいたなもの。家に住みついてるのは、わたしだけなのだ、不意に或る日、気がついた。家という容れ物は、家族を容れて成り立つものだという觀念に縛られていたわたしは、実は家は、わたし自身そのものだったのかもしれないと思いはじめたのである。

家の西側の裏山づたいをそのころ、犬の次郎をつれてよく歩きまわった。家からつぼにして犬と歩く。裏山づたいに七、八分も歩くと、病院や神社、御陵などがかたまつて建

っている一角がある。犬をつれていると、少々山の奥に入っても、暗くなってもこころづよいものである。犬の次郎と夕ぐれおそくまで歩きまわることもあった。

幣そよぐ山の日の暮れわたくしが灰になる日の山の匂ひする

「体力」

幣は、石座神社の幣。その幣が夕闇の中に白く翳りながらそよぎ、山の日の暮れの山の匂いがつよくする。古い神社の庭に立ち、昏れ沈む空を背にして裏山が暗く藍いろになつてゆくのを見あげていると、自分の人生の持ち時間を、ふと越えてしまったような気持ちになる。犬の次郎も死に、この歌を作つてからももう何年にもなるのに、この感じは今も変わらない。

(かわの・ゆうこ「塔」選者)